『いま思い出を記憶に返して』

－天高く猫眠る星シリーズ 4－

第一章　「初めは小さなかけら…」

「…という訳だ。色々と準備もあるだろうが、できるだけ早くベルギーに向かってくれ。」
「そんなぁ…。」
ここは連邦政治局の信州支局。あたしは…、どういう訳かあたしだけが局長に呼ばれていた。いつも 3 人一緒だったから、局長の前に 1 人で立つのは初めてだった。
あたしはやっとこ南極から戻ってきたばかりで、これでようやくキャティに行けると思っていたのに、すぐまた仕事だなんてあまりにもひどいと思う。だいたい約束が違うじゃないか。
あたしは南極から帰ってきたら、今度こそキャティに行ってもいいという約束で南極行きを承諾したのに…。
「あたしは 現在キャティ の担当になっているんじゃなかったんですか　？いくら局長といえども…。」
「ストーップ！もうよろしい。そんなことは言われんでも分かっている。だが生憎とこれは上の方からの命令だ。こればっかりは私に言われてもな。それにここだけの話しだが、MR-7 星系への航路は既に封鎖されている。」
「えーっ、どうしてぇ？」
「永世議会での決定だ。」
局長は苦虫をかみ潰したような表情でそう言い捨てると、椅子ごとくるっと後ろを向いてしまう。
「早く行ってくれ。これ以上頭痛の種を増やさんでくれ。」
「そんなのあたしのせいじゃないですよ。分かりました。あたしはあたしで勝手にやることにします。」
ついいつもの癖で局長に言い返してしまってから、しまったと思ったけどもう遅い。そう言えば、うちの局長はキャティ支持派だったんだっけ。
こんなので納得するのは絶対に嫌だけど、局長の気持ちも分かるし、これ以上ここで拗ねていてもむなしい気がする。あたしにしちゃあ、これでもかなり珍らしく引き下がることにした。
「失礼します…。」
一応、頭だけ下げておいて局長室を出る。とりあえず明子ちゃんに連絡が取れればいいんだけど…。仕方がないんで文化部の自分のデスクに戻ってくる。文化部の部屋では色々な人があたしのことを心配していたらしく、あたしがテスクについた途端、恐る恐るって感じであたしの周りに集まってきた。その中に一番早くあたしの前に来た人物が…、文化部室長の佛木先輩、みんなを代表して口を開く。
「どうだった？」
「どうもこうも…、今度はＥＣでの任務だそうです。」
「ＥＣって…、昨日南極から帰ってきたばかりじゃないか。」

「だから怒っているんです。すみませんけど、あたし明日から暫く休暇を貰ってもいいですか？」
「そりゃ構わないが、いったいどうする気なんだい？」
「ちょっと考えていることがあるので…。」
そう言ってみせたけど本当は考えていることなんて何もない。ただ、あたしの代わりに何とかなるように考えてくれるだろう人物を１人知っているから、その人に期待するしかない。
あたしは自分の鍵のかかった引き出しから、１枚のフロッピーディスクを取り出すと、注意してバックの中に入れる。おそらく、この先あたしにとって、この１枚のフロッピーディスクは唯一の切り札となりうるはずなんだ。
「あ、そうだ…。佛木先輩、シバちゃんと連絡取れますか？」
「うーん、難かしいけど不可能ではないからやってみてあげるよ。」
「お願いします。」
シバちゃんはあたしが南極に行ったのと同じくらいの時期に、ＥＣ圏内にあるＥＳＰ研究所に移されてしまった。お陰でもう随分長い間会っていない。どうせＥＣ圏に顔を出さなきゃいけないんだから、会っておきたいって気もある。
佛木先輩がどこかに電話している間に、あたしはあたしで、あたしの周りに集まってきていた人達に質問攻めにあっていた。
「ねぇ、MR-7 星系に行くの？」
「行きたいけど、こればっかりは許可が降りないとぉ…。何だよぉ、こういうことならカーラの方がよく知っているはずじゃないか。」
経済部のカーラ、どういう訳か昔からよく気が合う。あたしの情報源の１つでもある。
「そりゃそうだけどさ、ザウちゃんのことだから、また何か企んでるのかと思ったのよ。」
「ひっどぉい、それじゃまるであたしがいつもおかしなことばっかりやっているみたいじゃない。」
「うん、そうだよ。ザウちゃんってどこから見てもおかしいもの。」
これだ…、あたし、そんなにおかしいかな。まさかカーラにまで言われるとは思わなかった。だいたい、おかしいなんて単語を使うなら、カーラだって充分おかしいし、この信州局でまともな人なんているのかどうか…。
あたし達がワイワイ騒いでる間に、佛木先輩はどういう方法を使ったのか、見事にシバちゃんと連絡をつけたみたい。あたしを手招きで呼んでいる。
「そんなに長い時間は話せないらしい。」
受話器を受け取るとき、佛木先輩がそっとそう言う。あたしは頷いて、電話の向こうのシバちゃんに呼びかけた。
「シバちゃん…。」
「わぁ、本当に Mya？ね、元気？」
「うん、シバちゃんも元気そうで安心した。今、どんなことやってるの？」
「毎日毎日テストばっかり、もう疲れちゃって…。」
「大変そう…。ね、あたし今度ＥＣに行くんだけど、その時に会えないかな？」
「無理だと思う。あたしここに来てからまだ１度も外に出たことないもの。」
「嘘でしょう。分かったわ、あたしが必ず何とかするから、それまで待ってて。」
「うん、なんだかよく分からないけど、待ってるわ。でも、Mya、無理はしないでよ。」

「うん、それじゃ、またね。」
なんか本気で腹が立ってきたぞ。
あたしがキャティに行けないのも、MR-7 星の航路が封鎖されたのも、シバちゃんがテスト漬けなのも、みんな連邦政治局という組織のせいなんだ。
あたしとシバちゃんと明子ちゃんの 3 人は、いわば連邦政治局の研究所から真っ直ぐ上ってきたくちで、他の人みたいにこの世界に憧れて研修所から入って来たのとは根本的に違う。だいたいその研究所だって無理矢理入れられたようなものだし、連邦政治局を辞めることには何の抵抗もない。それはシバちゃんと明子ちゃんも変わらないと思う。
「柴野さんに会うんだ？」
「会えれば…ですけどね。」
「だったら、もし会えたら伝えて欲しい。君らが何を考えているのかは知らないけど、ベルギーのことなんか忘れてしまえってね。ここにいる連中はみんな、君らを支持しているから。」
「佛木先輩…。」
佛木先輩は今でこそ室長の肩書きを付けてしまって近寄りにくくなっちゃったけど、あたし達 3 人がここに来たばっかりの頃はまだ肩書きもなくて、あたし達の教育係として口で言えないくらいお世話になった。今はあたし達だけ構う訳にもいかないから自然と距離ができてしまってたけど、それでもやっぱり今でもあの頃の佛木先輩に変りはないんだ。
「ありがとうございます。」
「それから科学部から、ちょっと行く前に寄ってくれって言ってた。」
「何ですか？」
「さぁ、行けば分かると思うけど。それじゃ気を付けて…。」
「はい、じゃあ、行ってきます。」

第一章　「初めは小さなかけら…」

H6.26.APR

第二章 「出生の秘密」

ベルギーに来るのももう随分と久し振り、一時期は毎週のように来ていたのに、最近はキャティ以外の任務が忙しくって、ずーっと来れなかったんだ。
あたしはベルギー本部の受付けでＩＤカードを示すと、いつものようにそのまま通り抜けようとした。
「あ、待って下さい。そのＩＤカードでは入室を許可する訳にはいきません。」
受付けの女の子はあたしと同じぐらいの歳かな？その子が慌てた様子であたしを呼び止めている。
「どうしてですか？」
「だって、そのＩＤカードは仮発行で期限が切れています。」
「えっ？あ、本当だ。ごめんなさい。」
言われてみれば確かに、あたしが見せたのは１年前初めてキャティに行った時、仮発行して貰ったＩＤカードだった。あの後、自分のＩＤカードがすぐ出てきたから、もう用済みになっていたんだけど、あたし間違えちゃったんだ。
あたしは慌てて本物のＩＤカードを見せた。本物のＩＤカード…こっちには期限なんかなくて、一生あたしが連邦政治局にいる限り、使用することになる奴。
本来ならば１人に１枚のＩＤカードがあれば充分で、自分のＩＤカードが見つかった時点で仮発行の物は破棄すべきだったのに、すっかり忘れていた。
「どうぞ、そのまま委員長室までお進み下さい。」
受付けの女の子はニッコリ笑うと右手で奥の建物を指し示した。
あたしは軽く頭を下げて、連邦委員長の部屋に向かう。
思えば皮肉な話しだ。あたし、ここへはこのＩＤカードを返すつもりで来たのに、それなのにもう１枚あたしのＩＤカードが出てきてしまった。しかもこの仮ＩＤカードはキャティの思い出にはなくてはならない物の１つ、それをキャティの為に捨てなくてはならないとは…。
「ピッ、カツラミワ中尉確認しました。」
ウィンダムの声も今ではすっかり慣れてしまった。前は来る度に律儀にも驚いていたのに…。
「これはこれは、桂中尉ではないですか。パリ支局で情報部の任務に就いているとばかり思っていましたが。」
「そのことで文句を言いにわざわざ休暇を取ってここに来たんです。」
連邦委員長のヒョウヒョウとした表情を見た途端、急に意地悪な気持ちがもたげてきて、ツンとした言い方になる。
「いったいどういう文句が言いたいんです？」
「あたしはキャティ担当だったはずです。それが何故南極やパリの任務なんですか。明子ちゃんはキャティに行かせて、どうしてあたしは駄目なんですか？もう納得できないんです。説明して下さい。でなきゃ…。」
「でなきゃ…？」
「でなきゃ、これは返します。」
あたしは２枚のＩＤカードを連邦委員長…、いや和岐さんの前に放り投げる。
「どういうことだ？」

「連邦政治局を辞めます。あたし、知っているんですよ。あたしと明子ちゃんとシバちゃんの 3 人をこの世界に引きずり込んだのが誰だか。和岐さんが研修所時代、関東地区を封鎖させた張本人であることを…。」
いきなり和岐さんの顔色が変わった。まさか、あたしがそこまで知っているとは思わなかったらしい。しかし、これは事実だ。
和岐さんは目の前にあるデスクをなぎ倒して立ち上がると、あたしの肩を両手で掴んで、そのまま勢い余って壁際まであたしの身体を引きずっていく。
「い…痛い！」
「なぜ知っている？君はまだ生まれていなかったはずだ」
「だ、だって、それがあたしの能力だもん。情報を集めるのがあたしの能力だって、和岐さんが決めたんじゃないか。」
恐い顔…、真実をつかれて本当に怖えているのが伝わってくる。あたしの肩を掴んでいる和岐さんの手が震えている。
「許してくれ…。」
和岐さんはそう一言だけ言うと、その場に崩れ落ちた。
あたしは持ってきたフロッピーディスクを和岐さんに差し出しながら、なんとなく罪悪感を感じていた。思えば、あたしは連邦政治局という組織に腹を立てて、ここまで来たはずなのに、いつの間にかそれが和岐さん個人に向けられてしまっている。あたしはこんなことを言いにここまで来た訳ではなかった。
「これに 12 年前の事件についてのデータが入っています。自由に処分して下さい。それからあたしはもうとっくに許してますから…。」
12 年前…、まだ日本の首都が東京にあった頃、あたし達 3 人はまだこの世に生を受けていなかったのだ。
和岐さんがまだ研修生だった時、連邦政治局ではクローン技術がほぼ実用化の段階にまで来ていた。ただ世間の倫理感などを考慮し、その対象は学術目的に限るというものだった。その為、すべての実験体には人権がなかった。
和岐さんも当然の結果としてクローン技術の講義を受け、その時に実験体を 3 体作り上げた。それが、あたし達 3 人だった。
現在は学術目的と言えどもクローンを作ることは禁止されている。まさにあたし達 3 人は非合法な存在だった。
「俺は人間の形をしている君達を単なる実験体として割りきることができなかったんだ。君達を生き延びさせたかった。感傷だったと言ってくれても構わない。だが君達はこうして確かに生きているんだ。」
和岐さんが苦悩に満ちた表情で呟く…。
あたし達は生きのびる為に、その頃クローン技術を専門に扱っていたＦＧＬ研究所に移され、そこで通常の 5 倍の速度で成長を早められた。そして疑似記憶を与えられ、生きて行く手段としてそれぞれ能力を持たされた。
あたしが情報…、シバちゃんが防御…、アキコちゃんが行動…。本来ならばクローンにこういう因子を与えてはならないことになっている。その為に和岐さんはあたし達を自分の目の届く範囲に置

くことにして、あたし達を連邦政治局に入れたのだ。
皮肉なことにあたしはその連邦政治局のデータバンクですべてを知ってしまったんだけど。
「あの爆発のことは関東地区の封鎖と共に闇に葬り去ったはずだったんだ。だが実際には指田少佐はああいう身体になり、データが君の手の中にある訳だ。」
「どういうことですか？」
「あの爆発がなければ、私は連邦委員長なんかにはなっていなかったということだ。私はあの時の責任を取る為に、こんな堅苦しい椅子に座っているんだよ。」
苦しそうに顔を歪めて、そして、やおら真剣な表情に戻る。
「そう、君達は私にとって二重の意味でネックだったんだ。もう引き際かもしれない。私が消える時も本当に近いようだ。いや、本当はもっと早く消えるべきだったんだ」
和岐さんはあたしの持ってきたフロッピーディスクをダストシュートに放り込むと、書類棚の中から１冊のファイルを取り出してあたしの前に置く。そして、煙草に火を付けるとゆっくりとした動作で椅子に座った。
「そのファイルには当時のことの顛末がすべて書いてある。もし、他の２人が知りたがった時、それを見せてやってくれ。」
「でも…、いいんですか？あの２人はまだ何も知らないんですよ。」
「構わないさ、本当なら私が直接会って謝らなければならないのを、それで済ましてしまおうと思っているんだから。」
「消えるって、どういう意味なんですか？」
「さあね、私にもよく分かっていないことは訊かれても答えようがないよ。ただ１つだけ確実に分かっているのは、私が連邦委員長でいることを快く思っていない連中もいるということだ。」
寂しそうに笑う。煙草の煙がゆっくりと揺れる。
「ピッ、お茶をどうですか？」
ウィンダムがタイミングよく香りのいいお茶を持ってきてくれた。
「ピッ、どうぞ。」
「ありがとう…、あれ？これ…。」
ウィンダムからカップを受け取って、すぐ気付いた。この香りはキャティのお茶だ。
「気が付いたか、これはキャティ産のテランというお茶なんだ。キャティから持ってこさせたんだが、地球ではとうとう育たなかったよ。MR-7 星がなくなれば、たぶんこのお茶も飲めなくなるな。」
あー、そうだキャティのこと、すっかり忘れていた。あたし、キャティに行きたいからって抗議してたんだっけ。
「桂中尉、新しい命令だ。ＥＣでの任務はキャンセルさせるから、キャティで湯浅中尉と合流したまえ。MR-7 星への航路はあと３日で完全に封鎖される。できるだけステーションＶＲが完全撤退する前にキャティに到着してくれ。」
「そんなことして大丈夫なんですか？」
「今さら私のことは心配しなくてもいい。これでも連邦委員長の肩書きを付けているんだからな。自分のことは自分でなんとかするさ。あ、あと一つ伝えておこう。信州に情報部が設立されたんだ。高橋稜と三好栄次の２名が配属されている。何かあったら彼らに協力を求めるといい。」
「はい、分かりました。でも、もう一つお願いがあるんですけど…。」

「分かっているよ。明日中には柴野中尉に会えるはずだ。その後どうなったとしても、それは君達の責任外だ。ま、頑張りたまえ。」
和岐さんが悪戯っぽい笑みを浮かべて、小さなＢＯＸを放ってよこす。
「これは？」
「ＩＣカードが入っている。この中にはＥＳＰ研究所のセキュリティシステムを混乱させるデータが入っている。柴野中尉を連れ出すには、おそらくこれで充分なはずだよ。とにかく君達のことはどこにいても見ているつもりだ。たぶん、会うのはこれが最後になるだろうがね。」
「あたし、生まれて来たことを後悔なんかしません。あたし自分が好きです。みんなが好きです。地球が好きです。」
「それでいい。よし、行ってきたまえ。」
「はい。」

第二章　「出生の秘密」

H6.26.APR

第三章 「運命の神・カリフォン」

「Mya、ステーションから通信が入ってるんだけど…。」
シバちゃんをＥＳＰ研究所から連れ出したあたしは、ステーションＶＳまで来ていた。ここまでは問題なく来れたんだけど、本当の問題はここからなんだ。
「なんだって？」
「MR-7 星への航行は許可できないって言ってる。永世会議での決定には逆らえないみたい。」
「まったく…、しょうがないなぁ。じゃ、すぐ発進しちゃお。」
「大丈夫かしら…？」
「こんなのいちいち気にしてちゃキャティに行けないもの。それに航路が封鎖されているのって初めから分かっていることだったし。」
あたしの答えにシバちゃんは肩をすくめてみせただけでそれ以上何も言わなかった。たぶん言っても無駄だとでも思ったんじゃないかと思うけど…、それは当たってる。
あたしはすべてのシステムをチェックすると、パワーアップさせてコンソールを見る。ＤＣＭに出ている記号はさっぱり分からないけど、グリーンランプが点灯しているからきっと大丈夫なんだろう。あたしは構わず発進させてしまう。どうせこのステーションで他に発進する船もいないだろうから、事故の心配もないに違いない。
「Mya、ステーション側が凄い勢いで怒ってるわよ。」
「気にしない、気にしない、発進してしまえば、何を言われたって恐くないもの。」
「さすが…と言いたいけど、後ろからパトロール艇が追ってくるわよ。」
「えっ…。」
目の前のＤＣＭをレーダーに切り換えると…、確かに 1 機追ってきている。まったく妙なところで仕事熱心なんだから…。
「振りきっちゃお。シバちゃん、身体をしっかりと固定させた方がいいわよ。ひょっとすると転がるから。」
「あたしは転がらない方のがいいな。」
「あたしもね。でも、このカリフォンはどっちが好きなのかあたしも知らないのよ。」
あたしはセーフティを解除し、いきなりチェンジグランと注意書きのあるスイッチを入れてしまった。
「大丈夫なの？まさか、また暴走するんじゃないでしょうね。」
「大丈夫、大丈夫、このカリフォンはうちの科学部の技術を集めて作った船なんだから。あんなアルトロンと一緒にしないで平気よ。」
そうそう、ベルギーへ行く前に科学部へ寄ったら、いきなりプレゼントされてしまったのがこのカリフォンだった。どうせアルトロンはアキコちゃんが乗ってっていたし、あたし達にとってはこの上ないプレゼントだった。
その時に宇民先輩が言っていたのを思い出したのだ。何かあったらこのスイッチを押してみろと…。これは科学部へ行ってから聞いた話しなんだけど、現在連邦政治局はキャティを中心に 2 つに割れているとのことだった。いくらなんでも南極ではその手の話しは入ってこないので、あたしには珍らしく知らなかったんだけどね。どうも、これを機会に地球を再び戦場にしてしまおうと企む人が

いるらしいの。その為にもキャティを見捨てる訳にいかない。誰か１人でもキャティを助けようとしなきゃ…。
航路の封鎖の理由もあのあとすぐ分かった。MR-7 星がもうすぐ爆発すると POWLA が予想しているのだ。永世議会ではこれを理由にキャティから撤退を開始していた。和岐さんは、それをたった１人で食い止めようとしていたのだ。
「ねぇ、Mya。」
「なぁに？」
「まだ追ってきてるわよ。」
「え…。」
見ると、さっきのパトロール艇がまだレーダーに映っている。
「おかしいなぁ、このカリフォンについてこれる船はないはずなんだけど。」
このカリフォンに付いている推進装置は特別製のはずだから、こんなに簡単に追ってこれる訳はないんだ。…と、宇民先輩に聞いたんだけどなぁ…。
一応、この推進装置の説明は聞いたんだけど、難しい部分は全部忘れた。で、覚えていることと言えば、今このカリフォンは通常のディメンション空間にいないということ。だから高速道路をカリフォンだけで借り切っているようなものらしい。ということは、あのパトロール艇もカリフォンと同じ推進装置を積んでいるとしか考えられない訳だ。
「シバちゃん、呼んでみてくれる？あのパトロール艇、たぶん、うちの船だよ。」
「いいの？もし、反対派側の船だったら。」
「大丈夫、大丈夫、そんなことは絶対にないから。ひょっとしたら知っている人かもしれないし…。」
「Mya はちょっと楽天的過ぎると思う。でも、そこまで言うなら、やってみるけど。」
たぶん、あたしの考えに間違いがなければ、あのパトロール艇もこのカリフォンも作った人は同じはず。そう考えればあれに乗っている人間も大体予想がつく。
シバちゃんがパトロール艇と連絡を取っている間に、あたしはカリフォンのシステムチェックをやることにした。最初の時があれだったから、最近は一応チェックする癖をつけてしまった。不思議なものであれだけ面倒くさかったシステムチェックも慣れてしまえばなんということはなくなってしまった。
「こちらカリフォン、本艇に接近中のパトロール艇、応答願います。」
「……。」
「こちらカリフォン、本艇に接近中のパトロール艇、応答願います。」
おかしいなぁ、予想では向こうがこれに応答して、意外とよく知っている人でめでたしめでたしのはずだったんだけど…。
「Mya、どうも駄目みたい。このままだとあと 5 分くらいで追いつかれると思うけど、どうするつもり？」
「どうするって言われてもぉ…。」
これは困った。シバちゃんは信頼しきった目であたしを見ているし、あたしはこのカリフォンについてあまりよく分かっていないし、こんな事態になってしまったらどうしていいか困ってしまう。
「Mya ったらぁ…。」
どうしよう…？いっそのことこのチェンジングランのスイッチを解除しようか。あ、でも解除の方

法なんて聞いてないや。
「Mya、あと2分しかないわよ。」
しょうがない、もう1回押しちゃえ！
チェンジングランのスイッチを2度押すとどうなるか、残念なことに分からないんだけど、少なくとも解除しなかったことだけはすぐ分かった。あたしに分かっていることは、この先何が起るのか考えたくないということだけ…。
「シバちゃん、駄目だったらゴメンね。一応シートに身体を固定しておいた方がいいんじゃないかなぁ…と思うんだけど。」
「Myaにしては珍らしく気弱なことを言うのね。あたしは初めからMyaに任せているもの。それに今ならあたし何でもできそうな気がするし。」
本当、こうなったらシバちゃんの防御能力に期待するしかない気がする。
レーダーはもう既に役立たずになっていて、なんだか訳の分からない模様がぐちゃぐちゃに渦巻いている。
カリフォンがどこまでもつか…、でも不思議と死ぬとかそんな気はしない。何故だろうか、あたしにはあたし達の先にある物が闇でなく光りだということが分かるんだ。それが何を意味しているのか、それは神だけが知っているのかもしれない。
「Mya！」
シバちゃんが叫んだ瞬間、物凄い衝撃が押し寄せ、身体を固定していなかったあたしは思い切りパネルに叩きつけられた。
「Mya―――！」
シバちゃんの声が小さくなっていく。なんか気が遠くなってきた。あ…。

第三章　「運命の神・カリフォン」

H6.26.APR

第四章　「彼方へ…そして…」

あたしはどこにいるんだろう？ここはいったいどこなんだろう？
あたしは目が覚めてすぐシバちゃんの姿を捜した。でも、シバちゃんの姿はあたしの近くにはなかった。ううん、シバちゃんがいないどころか、あたしの目覚めた場所はカリフォンの中じゃなかった。これがどういうことなのか、理解するのに少し時間がかかる気がする。
とにかく、ここはどこか海岸だった。海と砂浜が目の前にあるんだから間違いがない。でも、あたしがこんな所でなんで寝ていたのかはさっぱり分からない。いったいカリフォンはどこへ行ってしまったのか、シバちゃんは無事だったのか…？
こうしてても仕方ないわね、とりあえずどっちかに歩かなきゃ。ここがどこで、カリフォンがどうなったのか、それを調べることくらいしか今のあたしにできることってないみたいだし。
今になって気が付いたんだけど、ここからそんなに遠くない所に大きな橋があるのが見えている。螺旋状の部分を30mくらい上がっていく大きいアーチ型の橋。海の方に伸びているようだけど、あそこの沖に島でもあるのかしら…。ま、行ってみりゃ分かることとは思うけどね。
あたしはもう1度、自分の周りをよく見てから歩き出した。今あたしに一番確実なのは自分の足で歩き出すことだけなんだ。
い…意外と自分で歩くと遠い…。いくら歩いても、歩き始めた最初と橋の大きさが大して変わらない。いくらあたしがのんびり歩いているからって、これはあんまりだと思う。どうも空間がねじくれているみたい。となれば、あたしにも考えがあるぞぉ。
あたしは橋に向かおうと考えるのをやめた。正確に言えば、身体は橋へ橋へと向かっているんだけど、心の方では離れよう離れようと考えていたの。もし、この空間が心理的作用の強い空間だとすれば、これで何らかの変化が現れるような気がしていた。
現れるはずだった…。なんか現れてよぉ。んもう、いい考えだと思ったんだけどなぁ。別にそういう訳じゃないのかなぁ、全然変わりがないんだもん。いったい、どうしたらあの橋に行けるのよぉ。
「みゃお…。」
び…びっくりしたぁ。いきなり猫が目の前に飛び出してくるんだもん。
「お前どっから来たの？」
「みゃうぅ…。」
よく見ると、この猫さん、瞳の色が角度によって変わるんだ。毛並の方は普通の三毛猫なんだけどなんか面白い。
2回ほどあたしの足許を回ると、まるであたしについて来いとでも言っているように、頷きながら歩き出す。
「ま、待ってよ。」
慌てて猫さんの後を追い始めると、猫さんはあたしに合わせて、走ってみたり、立ち止まったり、時にはあたしの足許にじゃれついたりしながら、アーチ型の橋の方へと向かう。なんか、この猫さん、あたしがあの橋へ行きたがってんの知ってて案内してくれているみたい。
ふいにこれは夢じゃないかという気がしてきた。本当はあたしは単にカリフォンの中で気絶しているだけで、今あたしがこうしてここにいること、見ている物はすべてあたしの夢の中の物じゃないかという気がしてきた。

「そうだ、お前の名前はユメにしよう。ユメ、ね、いいでしょう？」
「みゃおん。」
ちょっと首を傾げて、それから気に入ってくれたのか、一言鳴くと、たったか走って行ってしまう。
「ユメ、待ってよぉ。そんな風に走られたら追いつかないじゃないかぁ」
時折、立ち止まったりするのはさっきと同じだけど、今度は決してあたしに追いつかれないようにある程度の距離を保ちつつ、どんどん行ってしまう。まるで鬼ごっこを楽しんでいるかの様に…、「鬼さん、こちら。手の鳴る方に。」そう言いた気な雰囲気ですらある。
「ユメったらぁ。」
いい加減息があがってきた。いくらテレテレ走っているとはいえ、砂浜をこうやって走るのは簡単そうで意外ときつい。これ以上走れない…と思った途端に、砂の上に転がってしまう。そのままうつ伏せになったまま砂を眺めていると、ユメがいつの間にかあたしのすぐ目の前に座っていた。
「ハァハァ…、ユメ、いったいどうしたのよ。」
「みゃう…。」
ユメは上を見上げる。あたしもつられて視線を上げると…。
今までユメを追いかけるのに夢中で気付かなかったんだけど、いつの間にかあたし達はアーチ型の橋のアーチ部分まで辿りついていた。
「やっぱり、案内してくれたんだ。」
「みゃあ…。」
「おいで。」
あたしは身体を起こすと手を広げてユメを招き入れた。ユメはちょっと首を傾げて、ゆっくり近寄ってくると、あたしの手に身体をこすりつけて甘えてくる。
「一緒に行く？」
それには答えず、ユメは黙って、あたしの肩までよじ登ってしまった。大きさの割にはほとんど重さを感じなかったけど、どうせ夢なんだから不思議でもないや。
あたしはユメを肩に乗せたまま立ち上がると、目の前の螺旋状の坂を登り始めた。あたしが螺旋を1周するごとに、それだけ高さが徐々に高くなってきて視界もだんだん広がって行く。ユメもこの風景を見るのは初めてなのか、あたしの肩の上で目をキョロキョロさせている。
「ユメはここに上るのは初めてなのかな？」
「にゃ…？」
「この先はいったい何があるのかしら？ひょっとしてこのままず一っとここにいなきゃいけないのかなぁ。」
「みゃおん。」
ユメはあたしの問いかけにいちいち答えてくれる。なんか昔にもこんなことがあったような気がする。気のせいだろうけど、ひょっとするとあたしのオリジナルが持っていた記憶なのかもしれない。そんなことを考えているうちに、とうとう最上部まで登り切ってしまった。つまり、アーチ部分の端っこに辿りついたって訳。で、ここに来て初めてこの橋の意味が半分だけ分かったような気がした。
橋から見る海はもう海でさえなかった。海だと思っていた物は宇宙空間だった。何百、何千という星が目の前に広がっている。いったいどれくらいの星があるのかあたしには一生かかっても数えら

れないだろう。
あっ、そうか！この橋はカリフォンの通ってきた航路その物だ。それくらいは私にもなんとなく分かる。としたらぁ、この橋の進む方向にキャティがある。
あたしは思わず走り出した。この先にキャティがある。上手くすれば、この橋はキャティに続いているかもしれない。そう思うといてもたってもいられなかった。
「みゃうぅ…。」
あたしがいきなり走り出したんで、ユメはバランスを崩しかけたらしく、必死に爪を立てて掴まっている。
「ゴメン、ゴメン。」
その様子がなんとなく可愛くて、あたしは少し足を遅くした。それでもまだ必死にしがみついているユメの頭をそっと撫でてやる。
その瞬間、前方から大量の光りが溢れてきた。
「嘘…。」
最初は大きな球となった光りが、あたしの身体を包み込む。その後から無数の矢のような光りが次々と飛んで来る。
なんで待っててくれなかったんだ、MR-7星、あたしはここまでやって来たんだぞぉ。お前を助ける為に来たのに、なんで待っててくれなかったんだ。
涙がほおを伝って流れてくるのを感じる。悲しいんじゃない、くやしいんだ。何もできなかった自分がどうしようもなくくやしかった。
キャティ…。ゴメン…。

第四章　「彼方へ…そして…」

H6.26.APR

第五章　「思い出に代えて…」

ピーッ、ピーッ、ピーッ…。
「はい、収容願います。現在位置を送りますので受信準備よろしいですか？」
うーん、あれぇ、シバちゃんの声？なんでぇ…。
あたしはまだボーッとしていて、なんでシバちゃんの声が聞こえているのか分かっていなかった。
「では20時収容、了解しました。」
あ、シバちゃんがこっちに来る。慌てて起き上がろうとして、フラーッとよろけてしまった。
「Mya、起きて大丈夫？」
「うーん、大丈夫だよぉ。」
「なんか、全然大丈夫そうに見えないけど…。」
「そうぉ、ちょっとふらついてはいるけど本当に大丈夫だって。」
そう言いながら、なんか身体があたしの言うことをきかない。どうしたんだろ。いくらなんでもこういうことは今までなかったのに…。
再びよろけそうになって、シバちゃんに身体を支えて貰った。
「ゴメンね。肝心な時に寝てて…。」
「でも、起きてもMyaのやれることってたぶんなかったと思う。とりあえずステーションに連絡がついたからそのうち誰か来ると思うけど、それまでどうしようか？」
「ここってどこなの？」
「ほぼ太陽系からちょっと離れた所、ちょうどステーションＶＲが地球に戻る途中らしいから、あたし達を収容してくれるって。」
ステーションＶＲがこんな所まで戻ってきている？地球は本気でキャティを見捨てる気なんだ。
「それから…、ちょっと言いにくいんだけどぉ。Myaが寝ている間にMR-7星が爆発したっていう連絡が地球から入ったの。本当かどうかはっきりしないんだけど…。」
「あ、うん、知ってる。」
「え…？」
「それで明子ちゃんは？」
「それが三好せんぱいが今ＶＲにいるらしいんだけど、それらしい船がキャティを飛び立ったという連絡は入っていないらしいの。なんか連絡が前後していて、どれが正しい情報なのか誰も分からないみたいで…。」
明子ちゃんのことだから、キャティの人々を見捨ててまでステーションに戻るようなことはないだろうな。でも、くまさんも一緒のはずだし、きっとなんとか生き延びる方法を考えているだろう。だったらあたしは何をしたらいい？このままＶＲに収容されてしまったら、2度とキャティの人に会えることはない。
「Mya…？」
いや、ＶＲに収容されちゃ駄目だ。もし明子ちゃんがまだキャティにいるのなら、あたし達はなんとしてもキャティに行かなくちゃいけない。
「Mya、どうしたの？」
「シバちゃん、カリフォンの推進装置の具合は？」

「えーっと、たぶん通常の航行には問題ないと思う。壊れたのは例の変なシステムだけだから。だけど、これでキャティまで行くとなると１週間はかかるわよ。」
1 週間かぁ…、あたし１人なら迷わないんだけど…。
「ピーッ、こちらステーションＶＲ、カリフォン応答願います。」
スピーカーから突然ステーションＶＲからの声が響く。
「Mya！」
「とりあえず応答してくれる？」
シバちゃんは黙って頷くと、コンソールの前についた。
「こちらカリフォン、ステーションＶＲどうぞ。」
「あと 10 分で収容できるが、そちらの準備はどうなっているか送って下さい。」
シバちゃんはどうするのって顔で、あたしの方を見ている。
どうしよう？どうしたらいいんだ。ここで我が侭を通せば、シバちゃんの一生を左右しかねないし、1 度ＶＲに収容されて、はたしてキャティに向かえるのか…？たぶん不可能だろう
「さっき、三好せんぱいが来ているって言ったわよねぇ。だったら三好せんぱいと話してみたい。」
シバちゃんは黙って頷いた。
「そちらに情報部の三好少尉がいるはずです。代わって下さい。」
「ちょっと待ってくれ。」
暫くの間の後、三好せんぱいの声が響く。
「まったく、俺がちょっと待てと言っているのに聞かないからそうなるんだよ。せっかく宇民先輩からの伝言を持ってきたのに…。」
「じゃあ、後ろから来ていたのは三好せんぱいだったのぉ？」
「そうだよ。いくら呼んでも応答しないんだから。」
「こっちも呼んでいたんですよ。」
「チェンジングランモードにしてしまうと、一切の通信機器は使用不可能になるんだそうだ。実はそれを言いに来たのに、どうも間に合わなかったようだね。」
「ですね。ところで MR-7 星は現在どうなっているんですか？」
「まだ爆発はしていないよ。ちよっと前に急にソルトリバーが光ったんで地球で勘違いをしたようだけど。」
「あたし達、ＶＲに収容されるとどうなります？」
「たぶん、そのままＶＲと一緒に地球に戻ることに…。連邦委員長が行方不明なんだ。」
「では収容は結構です。カリフォンはこれより独自に MR-7 星系キャティに向かいます。」
「シバちゃん！」
いきなりシバちゃんがあたしからマイクを奪い取って、そう言ってしまう。
「だが、もう今からでは間に合うまい。地球に戻りたまえ。」
ＶＲ側も人間が最初の人に戻った。
「間に合わなくてもいいんです。これよりすべての通信をカットします。地球の皆さんによろしくお伝え下さい。」
ブツというノイズと共にスピーカーが死んだ。シバちゃんがすべての通信システムをＯＦＦにしてしまった為だ。

「ちょっとぉ、そんなことして…。」
「あたしがやらなきゃMyaがやってた…でしょ？あたしも考えていることはMyaと一緒だもの。それくらいは分かるわ。」
これ以上言うだけ無駄だわ。シバちゃんはその気になればあたしの心の中を覗くことだってできるんだから。こんなことで言い合いをしても時間の無駄。
「シバちゃん、推進システムをチェックして、あたし、他の部分のチェックをするから。」
「了解。」
カリフォンが再び覚醒める。ステーションＶＲはもうすぐ目の前まで来ているけど、何かする訳でもなく、じっと静止したままカリフォンのそばにいる。
あたしは航行先の座標系をフリーのままにした。おそらくプログラムモードは何の役にも立たないんじゃないかと思えたから。この先何があっても、あたしとシバちゃんの2人ですべてを乗り切らなきゃならないんだ。
「みゃう…。」
「きゃあぁ…！」
「シバちゃん、どうしたの？」
「猫…。」
シバちゃんがいきなり叫び声をあげたと思ったら、すごい顔をして部屋の隅を指差している。
「どこから猫がまぎれ込んだのかしら…？」
猫…ユメがいる。あれは夢じゃなかったんだ。
「大丈夫、その猫はユメっていうの。可愛い奴だからそんなに驚かないで。」
「うん、ちょっとびっくりしただけだから。」
ユメはまるで普通の猫よろしく、あたしに擦り寄ってくる。
「分かった、分かった、お前もいるって言いたいんでしょ？」
「みゃぁ…。」
キャティに辿りつくまで1週間の旅、いますべての思い出を記憶に変えて走りだす。

第五章　「思い出に代えて…」

『いま思い出を記憶に返して』

－天高く猫眠る星シリーズ4－

H6.26.APR